隠れオタクと、カオスな友達

野上　　まこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
隠れオタクと、カオスな友達

【Ｎコード】
Ｎ８５５４Ｏ

【作者名】
野上　まこと

【あらすじ】
「カオスな世界にならんかなぁ・・・・」
顔が丸いこと以外は普通だと思っている元木信司は凄い秘密を持っている
中学三年生。
実は彼は隠れオタクなのである。
下校中、彼は友達からアニメイトに行かないかと誘われた。
その時は、世間体を理由に行くのを断ったのだが・・・・・

隠れオタの悲劇！

「はぁ～・・・・・」

俺は3時間目の授業中深いため息をついた。
これで今日何回目なんだよ・・・・とか自分で言いながら再び大きく溜息を吐く。
それを見た後ろのやつが、
「おい、あんま溜息すると幸せ逃げてくぞ？」
「大丈夫！！もとからないから！」
俺は自信満々に最高の笑顔で言ってやった。
大体、溜息したら幸せ逃げてくっつーけど、そんなんだったら日本人口の約5割の幸せがもうなくなってるっつーの。
会話が終わった後俺は盛大な溜息をした。
その時俺は真顔でこんなことを考えていた
「カオスな世界にならんかなぁ・・・・・。」
「はぁ～・・・」
とか言いながら、ぼんやり青空を眺めていた。

ページの最初からずっとぼんやりとこの俺。
さて、そろそろ俺について一通り紹介しておこう。
俺の名前は元木信司。顔が少し丸いってところ以外は普通の中学三年生・・・・・・・・・・・・
だと自分では思っているヤバイ秘密を持っている中学三年生である。
まぁ、その話についてはおいおい語っていくことにしよう。
皆、楽しみにしておいてもいいかもしれ・・・・ないぜ？

時は進み下校中

俺は友達の永田道彦、みっちーと一緒に家に帰っている。顔はイケメン、運動神経もよく成績も悪くないという好少年である。だが、彼には一つだけ弱点があった。
それは、彼が筋金入りのオタクだということである。
しかも、所構わず、オタクトークしてくるし、全然自重してくれねえんだよ！
おかげで俺まで白い目で見られるし・・・・・・
全く残念なイケメンである。
ちなみに彼がみっちーと呼ばれているのは単に名前が道彦だからである。
決してバスケットで３Ｐが神がかっている訳じゃないから期待した皆残念だったな！
でまあ、みっちーと一緒に帰りながら適当なことを話していたわけなんだが、
みっちーがいきなりこんなことを言ってきた。
「信司ってさ、アニメとか興味ある？」
きたよ、アニメトーク・・・・・・
とか、思いながらも俺はこういった。
「ま、まあ、人並みかな」
「そっかー残念やな・・・・」
「残念ってどういうことだ？」
「いや、今度信司を一緒にアニメイトにでもさそおうかなとおもってんけど・・・・・」
なんだとぅ！？アニメイトだとぅ！？
俺は心にある自分の欲望を抑え、
「ごめん、俺オタクっぽいのはちょっと・・・・・」
「そうなんや。信司ってやっぱ顔の丸さ通りアニメ見ないのか～・・・・」
「顔の丸さは関係ねえだろ！」
ええ、どうせ顔丸いですよ！！

この前、保育園児とすれちがったらそのガキがお母さんに
あのお兄ちゃん顔まんまるだね。って言ってたよ！
全く子供ってのは、のほほんとした顔で心の傷を抉ってきやがるから残酷だぜ！
「うん分かった。じゃあ仕方ないね」
「悪いな、わざわざ誘ってくれたんに。」
「いいって、あ、おれんちこっちやから、ジャッ！」
ミッチーは俺に手を振ったまま家に入っていった。
ミッチーが家に入ったのを確認して俺は深いため息をついた。
「はぁ・・・・・・」
あああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！
ちきしょう！俺もいきてえよ！アニメイト！！
ずっと俺は二コ動やパソコンで見てあの楽園を何度夢見てきたことか！
実は、最初のほうに行っていた俺の秘密というのは、
実は俺は隠れオタクなのである！
だから、ずっとそういう楽園には行きたいとは思っているのだが
行くことができないのである。
隠れオタクのやつなら分かるだろう？
行きたい場所に行けないつらさ。
読んだラノベの感想を皆と語ることができないこのつらさ！
俺は、家までの帰り道下を向いて歩きながら心の中でこういった。
「ミッチー先生・・・・アニメイトに・・・行きたいです・・・・」

家に着いた俺は、真っ先に茶の間に向かった。
茶の間の広さは大体二十畳といたところで割と普通である。
そして俺はいつものパソコンがある、窓際のベストポジションへ突っ走った。
ちなみに、この位置は死角になっているため、家族が見に来ない限り

画面が見られることはない。
いや、言っておくが別にエロサイトとか見てるわけじゃねえんだぜ？
ただ、俺はゲームをしているだけである！
もちろん、いつも横にはティッシュが常備してある。
まぁ、深い意味はないんだけどね！
そして１０分後。
「ふぅ・・・・・」
何だか俺は清々しい気分になった。
いつもの儀式を終えた俺は本来の目的を始めた。
「おりピーさん。もう来てるかな？」
おりピーさんっていうのは、１週間前にチャットで知り合った人である。
知っていることは、彼女も俺と同い年ということと、彼女も隠れオタクだということである。
境遇が似ているということもあって、彼女とはチャットですく意気投合しともだちになった。
期待しながら、ルームの中をチェックしていくと、
「お、いたいた！」
彼女の名前を確認した俺は、そのルームに入室した。
ちなみに俺はチャット上ではシンと名乗っている。
シン：こんちは～。元気？
おりピー：あ、シン。こんにちは～久しぶりやね。
昨日会ったじゃねえか！
最近気づいたんだが、どうやらこの人は天然らしい。
俺が初めて会った時も、おれが「こんにちは～」とあいさつすると、
「え、こんにちはって今昼なの？」
と、予想をはるかに超えた返答が返ってきた。
あんたの部屋は亜空間ですか？と聞きたくなる。
まぁ、いつものことなのでスル―して会話を続けた。
シン：今日、友達にアニメイト行かないかってさそわれたｗｗｗ

おりピー：え！いいなぁ、あたしも行きたい！
シン：いや、友達とかに見つかると、面倒やし＾＾；
おりピー：そっか～・・残念やね。
シン：まぁ、ニコ動でも見ながら自分を慰めますよｗｗ
おりピー：そやねｗｗ
と、まあ話題も一区切りしたところである疑問が浮かんだ。
この人、どこに住んでんだ？
一週間も話していて知らないというのもおかしな話だが。
まぁ、何気ない気持ちで率直に疑問をぶつけてみたわけだ。
この後、悪夢が待っているとも知らずに・・・・・・・・
シン：そういや、おりピーってどこ住みなの？
おりピー：石川だよ＾＾
・・・・・・・・・・・・・まじで？
まさか・・・と思った俺はさらに言った。
シン：へぇ。石川のどこ？
おりピー：金沢ってところ。
「？ォ！！？」
俺は画面の前で叫んだ。
おりピー：シンは？
シン：ｍｅ　ｔｏｏ．
おりピー：なｗぜｗえｗいｗご
シン：それにしても偶然っすね！
俺は画面前であせりながら言った。
おりピー：そやねｗｗ
この後２分間ほど沈黙があった後、おりピーがこう言ってきた。
おりピー：あのさ、よかったらでいいんやけど・・・・
これもしかしてフラグ？と思いながら俺は
シン：どしたん？
と返すと、俺の予想を超えるセリフを言ってきた。
おりピー：明日一緒にアニメイト行かん？

ですよ・・・・・って明日ァ！？
まぁ、お誘いくらいは来ると思ったけど、まさか明日とは流石に予想外やったわ！
「いや、明日は流石に無理やろ、大体チャットを出会い目的でつかうのは犯罪やし、
そういうのは駄目やって！」
と心の奥で俺の良心が叫んでいたが、
シン：いいですとも！
心が欲望に忠実である。
おりピー：本当？じゃあ、明日の１０時１０９集合でいい？
シン：オッケー！
おりピー：ありがと＾＾
話に目処がついたところで、俺もそろそろ勉強しなければいけなかったので、
そろそろ、切ろうと思っていたところに
おりピー：あの・・・・シンって顔とかあんまり気にせん？
いきなり、こんな発言が送られてきたので、俺は一瞬戸惑った。
顔に自信がに自信がないのだろうかと考えながら、
シン：うん。大丈夫やよ！
と返した。当然の反応である。
こんな状況で「無理！」とかいうやつはある意味尊敬に値するな。
おりピー：良かった。ゴメン、あたしそろそろ落ちんなんから。明日１０９で！
シン：分かった。
そう言って、おりピーは退出した。

隠れオタの悲劇！（後書き）

自分は小説を書くのが初めてなので
面白いかどうかは分かりませんが、目を通してもらえたら
うれしいです。
また、誤字・脱字、文章的におかしい表現などもあるかもしれませんが、
目をつむっていただけたら幸いです。
批評等の感想は大歓迎なので率直に思った事を書いてもらえたらうれしいです。
次の回も張り切っていくので、よろしくお願いします！

隠れオタの無念！

翌日午前１１時。
俺はむちゃくちゃ不安を感じながら、１０８の前に来ていた。
顔とか気にしませんよね？と聞かれて
大丈夫！とは言ったが、
ぶっちゃけ力士みたいのが出てきたら他人装って逃げます！
だってみんなもそうだろう！？（泣）
集合時間は１１時３０分。
俺は３０分間おろおろしたり、おりピーがどんな子か妄想したり、
逃走ルートの計画を（頭の中で）練りながら、彼女を待っていた。
時間が迫るごとに不安は大きくなっていく。
ああ～こういう主人公が不安で知らない女の子を待っとるとき場合って
可愛い子来るフラグやよね！？
「ソウダ、コレハフラグダ。
フラグナンダ、フラグナンダ、フラグナンダ・・・・・・」
念仏のように俺が唱えていると後ろから、
「あのう・・・・」
と声がしたので、俺は後ろを振り向いた。
すると、後ろには女の子が立っていた。
だぼだぼな服に、ニーハイソックス。そして、大きな眼に、長い髪。
そして、電波のように立っている
髪が印象的な、ボンヤリ系の可愛い子だ。
俺の頭の中では、色々な感想が駆け巡っていたが、
最初に言った言葉は、
「良かった・・・・フラグだった・・・・・」
と涙声になって発していた。
俺が泣いている時、彼女は困った顔になりながら、

「？」
と擬音を発していた。

5分後、俺が泣きやんで、落ちついた後、
俺と彼女はとりあえず、自分についてを話しながら、アニメイトに向かっていた。
「名前なんていうの？」
と俺がきくと、彼女は、
「んー・・色々ありますが、人間界では乃ノ浦（ののうら）由利亜（ゆりあ）と名乗っています。」
ん！？
何か今変な単語が聞こえたような・・・・
人間界では？
俺はツッコミを入れたくて仕方なかったが、会話を続けた。
「えと、じゃあ由利亜でいい？」
「はい！構いませんよ！」
彼女はにっこり笑ってそういった。
可・・・・可愛いじゃねえか・・
「シンさんのお名前は何というのでしょうか？」
「俺は元木信司。信司でいいよ」
「了解しました！以後お見知りおきを！信司さん！」
・・・・・なんだかなぁ・・・

アニメイトの中などを一通り見た後、俺たちは昼食をとっていた。
俺は唐突に、こんなことを聞いてみた。
「由利亜って、学校では普通なの？」
由利亜は、単調な口調で言った。

「はい。人間としての仮の姿で学校に身を潜めている訳でありますから、
なるべく周りの人に合わせています。」
なんか、いちいち発言が厨二だなオイ！
まぁ、発言はこれだが、見てくれはかなりいい。
特にこのニーソ・・・・・ゴクリ・・
由利亜を見ると、俺からすこし距離をとっていた。
「信司さん・・・目が怖いです・・・」
彼女はおびえた目で言った。
「あ・・ああ、ゴメン。」
あぶねぇ、あぶねぇ。
理性を少し失っていたぜ！
それにしても、ニーソやべえ・・・ハァハァ・・・
俺は視線を少し上にあげ、胸をチラ見した。
「ちっ・・まな板かよ・・」
この発言をした瞬間、俺の体は宙を舞った。
そして、俺は気絶した。

隠れオタの無念！（後書き）

書くのは二度目なので、前よりは幾分ましになっていれば幸いです。
次回も頑張って描くので、楽しみにしていてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8554o/

隠れオタクと、カオスな友達

2010年11月23日06時13分発行